Ⅰ　プレゼンテーション能力の発揮度を高める演出技法
―――仮説―――

佐々木　正　實

1　はじめに―――研究の前提

結婚式でのスピーチや講演など、ひとりで話す形式を「ストレートトーク」と言う。出演者がカメラに向かってひとりで話す形式の番組は「ストレートトーク番組」と呼ばれる。ニュース解説、天気予報、講座番組などがその典型である。

ストレートトーク番組についての視聴者の評判は、一般にあまり良くない。同じトーク番組である対談番組、インタビュー番組、座談会などと比較して「つまらない」というのである。画面や音声に変化が少なく単調である、加えて出演者の話し方に魅力が無い、などがその理由である。

日本人は、一般にストレートトークが苦手である。しばしば指摘されるように、沈黙を金とした日本では、ストレートトークの達人は軽佻浮薄な人物とみなされ、低い評価を受ける傾向にあった。したがって、欧米と違って、口頭によるプレゼンテーション能力を高める教育は、ほとんど行われてこなかった。

プロデューサーやディレクターは、話し下手の日本人の中からストレートトーク番組の出演者を選ぶことになる。人選にあたっては、まず、番組のねらいに照らして、是非、視聴者に聞いてもらいたい内容を持った出演候補者を洗い出す。次いで、話が上手か、タレント性があるか、といったプレゼンテーション能力で絞ってゆく。

この作業にあたって担当者を悩ますのは、内容を持ちながらプレゼンテーション能力の低い人に出会った場合である。果してその人に出演をお願いすべきかどうか―――。こうした場合、出演交渉を断念するケースも多い。視聴者に内容がうまく伝わらなかったり、途中で別のチャンネルに切替えられてしまったら困るからである。また、あの人なら大丈夫だろうと思って出演をお願いしたのに、期待に反してプレゼンテーションがうまくいかない場合もある。

プレゼンテーション能力を高める方法については、様々なハウツーものに述べられている。大きな書店を覗けば何冊も並んでいる。ブームと言っても良いだろう。多くは、ビジネスマン向けである。こうした本には、発声法やジェスチャーの付け方、内容の整理の仕方等、どの本をとっても同じようなノウハウやコツが書かれている。確かに、処方箋どおりの努力をすればやがてプレゼンテーション能力は向上するのだろう。しかし、プロデューサーやディレクターとしては、出演候補者が自らのプレゼンテーション能力を高めてくれるのを待っているわけにはゆかない。それに、ビジネスマン向けの説得術が、スタジオでのストレートトークの場合にもそのまま通用するものなのかどうか疑問を感じないでもない。

一般にプレゼンテーション能力は、訓練によって向上する。だが、プレゼンテーション能力の変化は、こうした時間軸に基づくものだけではない。同じ人でも話をする場が違えばプレゼ

ンテーションの出来ばえは違う。多くの人は、経験的にこのことを知っている。あがってしまって結婚式のスピーチがうまくゆかなかったという経験をされた人は多いだろう。そんな時、本当は自分はもっと話がうまいはずなのに・・・と思ったに違いない。

「プレゼンテーションのできばえ」は、同じ人でも話しをする「場」によって違う。本研究は、ここに着目する。ストレートトーク番組出演者のプレゼンテーション能力そのものを高めようとするのではなく、出演者の持っているプレゼンテーション能力を最大限に引き出そうとする研究である。

なお、通常「プレゼンテーション能力」という概念には、ストーリーを組み立てる能力（構成力）や、プレゼンテーション機器を使いこなす能力等も含まれるが、本研究では除外する。

2　第１の仮説

ストレートトーク番組の典型である講座番組の出演者について考えてみよう。講座番組の出演者が、日常的にストレートトークを行う場は教室や講演会場である。この教室や講演会場で行うストレートトークとスタジオで行うストレートトークとの、プレゼンテーションのできを比べてみよう。

表ー１　　同じ講師によるストレートトーク

ストレートトークの種類	ストレートトークの場	プレゼンテーションのできばえ
授業や講演	教室や会場	良い
テレビでの講義	スタジオ	劣る

一般に、同一人による、講演や教室授業とスタジオ講義のプレゼンテーションを比較すると、講演や教室授業の方ができばえが良い。（仮説１ａ）

仮説１ａからは次の仮説が生まれる。

スタジオ環境を、講演会場や教室の環境に近づけるような演出上の工夫ができれば、講師は、カメラに向かってのストレートトークにおいても、その人の持っているプレゼンテーション能力を講演や講義のレベル近くまで発揮できる。（仮説１ｂ）

とすれば、教室講義を中継すればそれでよいではないか、という考えも出てこよう。しかしここでは、スタジオでのストレートトーク番組にこだわりたい。ストレートトーク番組の良さを捨てがたいからである。

ストレートトーク番組は、講師の論理を的確に展開できる。スタジオは、様々な映像素材を

使用するのに適した作りになっている。教育効果のある映像素材を的確に使った密度の濃い講義ができる。これに対して、中継形式は、講師にとっては、プレゼンテーションがやりやすいメリットがあるものの、現状では、日常的に行うには困難がある。時間的な制約、技術要員の数、機材の量、予算等の理由からである。

3　「第１の仮説」からのアプローチ

ストレートトークの「場」としての「スタジオ」は、「講演会場」や「教室」と、どんな違いがあるのか。これに関しては我々が、前年度に行った「講師にやさしい演出技法の研究」がある。

この研究では、先ず、スタジオ環境は講演会場や教室と比較して、講師の緊張を高める要因を持っているとみて、その特性について検討した。次いで、テレビ収録そのものが持っている「出演者に緊張を強いる様々な制約」を洗い出した。

その結果明らかになったスタジオ環境の持つマイナス要因、およびテレビ収録の持つマイナス要因を、演出上の工夫をすることで除去したり和らげたりしようとしたのである。講師は、スタジオでのストレートトークであるにもかかわらず、過度の緊張から開放され、教室での授業に近い気分で講義できることをねらったのであった。

この研究で行った分析や結論は、今回のテーマにおいても、基本的には適用できると思われる。過度の緊張が和らげば、その人のプレゼンテーションのできばえが良くなることは、疑う余地がないからである。ここに、その結果を整理して掲げる。詳しくは研究報告書を参照されたい。

１．講演会場や教室と比較したスタジオ環境の特徴（マイナス要因）

　１．聞き手の不在・・・講師は聞き手の反応が実感できないために、ぎこちない話し方になってしまう。また、目線のやり場に困り、定まらない。

　２．第３者の存在・・・カメラマンやアシスタントディレクターなど、聞き手ではない人達（スタッフ）が目障りな動きをし、気が散る。

　３．非日常的空間・・・密室性の強い空間、自分に当てられたライトなどが異常感・孤独感を一層強める。

２．講演や授業では存在しないテレビ収録の特性からくるマイナス要因

　１．台本による拘束・・話の筋を勝手に変えることがゆるされず、台本を思い出すことに絶えず気をとられている。

　２．進行上の主導権・・画面の切替等進行上の主導権は、ディレクターが握っている。その結果、自分のペースで講義しにくい。

　３．身体の位置や動きに対する制約

　　・・・照明や絵柄等の関係で、約束どおりの場所で約束どおりに動かねばならない。

　４．時間管理の負担・・約束の時間どおりに話し終えねばならない。

また、台本どおりのペースで進行させなばならない。

5．公開性・・・・・・誰が見るかわからない不安。特に同業他者の目がこわい。

スタジオ環境の特性およびテレビの論理からくる制約の結果、講師にとっては「カメラ向きバストショット」が恐怖となり、「時間管理の負担」が大きくのしかかってくることになる。

こうした分析に基づいて、スタジオでのストレートトーク番組収録に伴うマイナス要因を取り除いたり和らげたりするために、次のような９つの演出上の工夫を提起した。

＜講師の緊張を和らげるための演出上の工夫＞

1．基本的な演出形式を従来の「すわり」から「白板前立ち」にし、動きのある柔軟な演出とする。その結果、台本の拘束力は弱まり、番組進行上の講師の主導性が増す。加えて、「カメラ向きバストショット」も少なくなる。

2．「白板前立ち」の効果をさらに高めるため、図表の提示の仕方は、従来の「紙芝居方式」（重ねておく）から「美術館方式」（あらかじめ全て貼っておく）とする。

3．番組進行上の講師の主導権を確保するため、プレゼンテーションツールの一部（ＶＴＲスタートボタン等）を講師自身が操作する。

4．次画面表示装置を導入し、講師に次の画面を知らせる。

5．プロンプターを導入し、講師が番組の流れをつかみやすくする。

6．台本を見やすく工夫する。

7．ディレクターが副調整室ではなくスタジオで指揮をとり、講師とのコミュニケーションをとりやすくする。

8．時間調整の負担を少なくするため、途中で収録を一時中断し体制の建て直しを図る。

9．時間調整の負担を少なくするため、素材ＶＴＲの説明を事前収録とする。

こうした工夫をすることで講師に最も緊張を強いる「カメラ向きバストショット」は少なくなり、番組進行上の講師の主導権がある程度確保され、「時間管理の負担」も軽減されるなどスタジオでのストレートトークであるにもかかわらず、講師の過度の緊張は和らぐ―――これが結論であった。

この論理は、今回の「講師のプレゼンテーション能力の発揮度を高める」という発想から次のように言い換えることができる。

講師の緊張の度合い（リラックス度）が適度に和らぐような演出上の工夫をすることによって、スタジオでのストレートトークであるにもかかわらず、講師のプレゼンテーション能力の発揮度は、講演会場や教室での発揮度に近づくことが期待できる。（仮説１ｃ）

ストレートトーク番組出演者のプレゼンテーション能力の発揮度を左右する要素は、講師の緊張の度合い（リラックス度）だけであろうか。他にも何かありそうである。別の角度から手

掛かりを探れないであろうか。

4　第２の仮説

(1)　プレゼンテーション能力とは何か

これまで、「プレゼンテーション能力」という言葉を使うにあたり、「中身の構成力や、プレゼンテーション機器を使いこなす能力等は除く」という以外に、何の定義もせずに使ってきた。ここでは、「プレゼンテーション能力」とは何かについて考えてみたい。

出演者のプレゼンテーション能力を評価した調査がここに２つほどある。いずれも、放送大学の番組に関する調査である。ひとつは、放送大学が平成８年１２月に行った学生動態調査である。ここでは、学生に２４の項目について評価を求めている。このうち、プレゼンテーションに関しての設問は、「講師の説明はわかりやすかったか」と「講師の話しはききやすかったか」の２問である。

もうひとつは、放送教育開発センターと放送大学が、主に全国の大学教官を対象に放送大学番組の評価を依頼した調査である。ここでは、講義の進め方に関して１５問ほどとりあげている。このうち、「講義の流れに適当な緩急のリズムがあったか」「説明するときの話す速さは適切であったか」「説明するときの話し方は明瞭であったか」の３問が、プレゼンテーション能力に関わる設問である。

印象を問う場合には、このような設問の仕方しかないのであろう。しかし、ここでは、もう少しプレゼンテーション能力の中身に立ち入ってみよう。

プレゼンテーション能力とは何かについては、本報告書のⅡにおいて、村松が、詳述しているが、これを、本稿のテーマを念頭において整理してみたい。

A．発声や発音に関わる基礎的な要素

1．発声・・・・・・・・・自然で聞きやすい発声をしているか。
2．アクセント・・・・・気になるくせがないか。
3．イントネーション・・気になるくせがないか。
4．言葉の明瞭度・・・・聞き取りやすいか。

B．文体に関わる要素

5．文体・・・・・・・・・内容と場に応じた文体になっているか。
ストレートトーク番組の場合には、適度な話し言葉の文体になっているか。

C．話し方に関わる要素

6．声の張り・・・・・・声が届いてくる感じがあるか。
7．速度・・・・・・・・・適度な速度で話しているか。
8．緩急（メリハリ）・・大事な部分をゆっくり言っているか。
9．高低（メリハリ）・・大事な部分を高く言っているか。
１０．間・・・・・・・・・適度に間をとっているか。

D．非言語的な要素

１１．表情・・・・・・・・適度に豊かな表情で話しているか。

１２．アイコンタクト・・・必要な場合に視聴者と目線を合わせているか。

１３．ジェスチャー・・・・適度なジェスチャーを交えて話しているか。

(2) 第２の仮説に向けて

１から１３までのプレゼンテーション能力を構成する要素を「その発揮度を高める」という観点から眺めてみよう。

まず、発声や発音に関わる基礎的な要素である。この能力は、生育した土地や言語環境さらには肉体的特徴等に大きく依存していると思われる。特別な指導・訓練を受けなければ、矯正ないし向上が期待できそうもない要素である。プレゼンテーションの場による変化の少なそうな要素と言っても良い。

本稿で問題となるのは、Ｂ～Ｄのグループである。確かに「リラックス度」が高まれば発揮度も高まりそうな要素はいくつも見られる。話し言葉の文体をとるためには、リラックス度が適度に高くなくてはならないだろう。「適度に豊かな表情」や「適度なジェスチャー」も同じである。

しかし、その他にも発揮度を左右する何かがありそうである。例えば「適度に豊かな表情」や「適度なジェスチャー」は、俳優でも無いかぎり、台本を読んでいたのでは実現しそうもない。自然に話をしている場合にのみ表情は豊かになり、ジェスチャーも出てくるだろう。

「声の張り」は、大勢を前に話す時に実現しそうであるし、メリハリは、感情をこめて話す場合によりはっきり出てくるであろう。整理してみよう。

「難変化」要素

プレゼンテーションの場による変化が少ない構成要素。基礎的能力のグループ。

「リラックス度」連動要素

適度にリラックスした時に高い得点をあげられそうな構成要素。

「話し言葉度」連動要素

適度な話し言葉の時に高い得点をあげられそうな構成要素。

「感情度」連動要素

訴えたいという願いを込めて話す時や、感情を込めて話す時に高い得点をあげられそうな構成要素。

「元気度」連動要素

静かに話すよりも元気良く話した場合や、大勢を相手に話す時に高い得点をあげられそうな構成要素。

プレゼンテーション能力を構成している１３の要素が、話しの場による変化が少ない要素なのか、それとも「リラックス度」「話し言葉度」「感情度」「元気度」の４つの尺度のうちどれかと関連がありそうなのか、チェックしてみてみよう。

表－２　プレゼンテーション能力構成要素の性質

	リラックス度連動	話し言葉度連動	感情度連動	元気度連動	難変化要素
発声					○
アクセント					○
イントネーション					○
言葉の明瞭度					○
話し言葉の文体	○	◎			
声の張り		○	○	○	
適度な速度		○	○		
緩急メリハリ	◎	◎	○	○	
高低メリハリ	○	○	◎	○	
適度な間	○	○	○		
表情	◎	○	◎	○	
アイコンタクト	○	◎	○		
ジェスチャー	○	○	◎	◎	

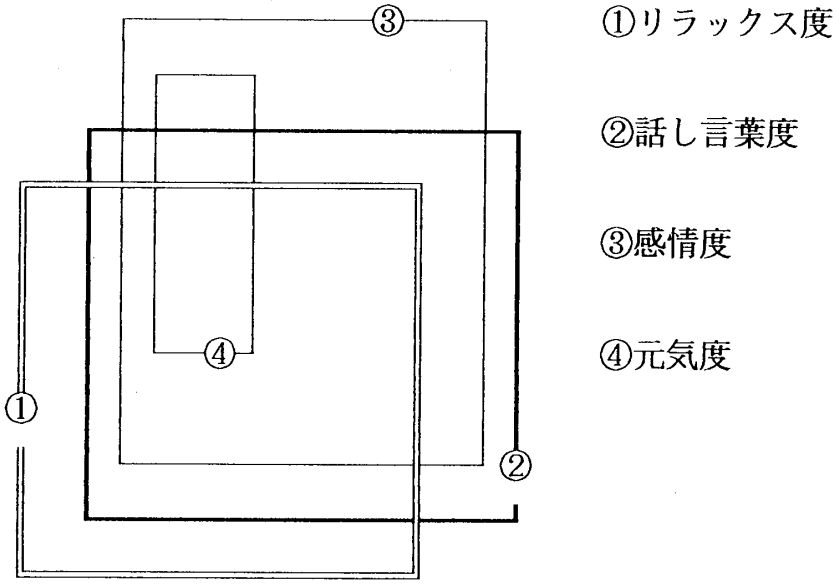
◎・・・特に連動が強そうな要素

発声、アクセント、イントネーション、言葉の明瞭度の４つは、育った環境による影響が大きく、プレゼンテーションの場による違いはあまり考えられない「難変化要素」である。本研究の対象からは、外さざるを得ない要素である。

この４つを除く、９つの構成要素については、どれにも○がついている。しかも、多くの要素には、かなりの数の○がついている。この表からは、リラックス度・話し言葉度・感情度・元気度の４つを適度にすれば、かなり質の高いプレゼンテーションが期待できるものと予想される。また、リラックス度・話し言葉度・感情度・元気度の４つの尺度自体、かなりの部分連動していそうなことがわかる。

この表をもとにリラックス度・話し言葉度・感情度・元気度の４つの尺度が、プレゼンテーション能力の構成要素にどの程度重なりあいながら影響しているのかを感覚的に表してみよう。

四角の大きさは、その重要性を表している。



図－1　4つの尺度の重なり具合と重要性

プレゼンテーション能力の発揮度を高めるためには、どんな視点から検討を加えたら良いのか、方向が明らかになってきたといえる。第2の仮説である。

出演者の「リラックス度」「話し言葉度」「感情度」「元気度」が適度になるような演出上の工夫を加えれば、出演者は自分のプレゼンテーション能力をより十分に発揮できる。 （仮説2）

5　第2の仮説からのアプローチ

「リラックス度」を高めるための工夫については、すでに触れた。ここでは「話し言葉度」「感情度」「元気度」の3つについて検討を加えたい。

(1)「話し言葉度」を適度にする工夫

表2からもわかるように、「話し言葉度」は、プレゼンテーション能力を構成する１０の要素の多くと関連している重要な尺度である。リラックス度や、感情度との連動性も高い。まず話し言葉の特徴を挙げてみよう。

＜話し言葉の特徴＞

1．くりかえしやもたつき、不完全な文章、独特の文体や終助詞
2．メリハリ（高低、強弱、間、緩急など様々な面でのメリハリ）
3．適度なアイコンタクト、豊かな表情、適度なジェスチャー
4．聞き手の反応に呼応した展開

スタジオで、このような話し言葉が成立するためには、どんな工夫をすればよいだろうか。

1．文体は、「書き言葉」ではなく、適度な「話し言葉」とする。

2．台本の「書き言葉」を棒読みしない。

3．収録に伴う制約を少なくし、緊張を引き起こす要素を減らす。

・くりかえしやもたつきをゆるす時間的なゆとり

・構成（話の順序）上の柔軟性

・自然な体の動きを許容する演出

4．聞き手の不在をカバーする工夫

この４つの工夫のうち「文体」を除いた３つについては、「講師にやさしい演出」の研究に際して検討を加えたものと同じである。ということは、「リラックス度」を適度にする工夫と同じである。「緊張」と「話しことば」が両立しがたいことを考えれば当然であろう。

しかし、「リラックス度」イコール「話し言葉度」とは言えない。リラックスしていても例えば朗読のように、「話し言葉」以外の文体をとることも可能である。したがって、まず、適度な話し言葉の文体が良いことを自覚することが重要である。そのためにも台本を読むことは避けたい。多くの講師は、話そうとする内容を事前に台本に書き込みたがる。講師によっては小さな字で台本の余白は埋め尽くされている。これでは、棒読みすら難しそうである。原則として台本には文章は書かないようにしたらどうだろうか。棒読みしたくてもできなくしてしまおうという発想である。台本には、話の順序が一目でわかるように、項目のみが空白を伴って書かれているのが良い。

聞き手が実際にはそこにいないのにいるのと同じ気持ちにさせることはむつかしい。留守番電話の場合を思いだせば、すぐに理解できる。留守番電話での話しは、誰でもぎこちない。話し言葉度が落ちることによる。また、プレゼンテーションのプロである落語家にとっても、誰もお客さんのいないスタジオでの録音は苦手であるという。

予備校の河合塾では、全国およそ２００の直営校舎や高校に向けて受験のための講義番組をＣＳ（通信衛星）を使って全国にナマ放送している。このスタジオを覗くと、講師の目に入りやすいところに、ＣＳを通して講義を受けている本校の教室風景が映し出されている。講師はモニターの中の生徒の反応をつかみながら講義しているのである。プレゼンテーション能力においてはずば抜けている予備校の講師ですら「聞き手不在」は苦手であり、何とかして、このマイナス要因を取り除こうとしているのである。

アメリカでは、ゴルフの選手をはじめ多くの人が「イメージ」を頼りに練習し、あるいは治療をする。この方法が有効かもしれない。講師は「聴衆がいるイメージ」を描きながら講義をすることになる。

(2) 「感情度」を適度にする工夫

講義の場合には、「感情」は「情熱」と言い換えられる。情熱を込めて話せば良い。ということは、放送局側のテーマ設定の問題であり、講師選択の問題につながる。訴えたいという情熱を秘めたテーマについて講義をしてもらうのである。あるいは、訴えたいという情熱を秘め

た人を講師にお願いするのである。「概論」は、講師の情熱をかきたてにくく、ストレートトークには馴染みにくいと言えるだろう。

ディレクターは講師にこのことを説明し、自分の講義したい内容についてはっきり意識してもらう必要があろう。

この感情度は、質の高いプレゼンテーションを実現するためには、きわめて重要な役割を果たす要素である。それにもかかわらず、これ以上の具体的な方法が思い浮かばないのは、残念である。

(3) 「元気度」を適度にする工夫

どのような環境を設定すれば、声に張りが出るかとい問題である。「声の張り」は、プレゼンテーションの出来ばえに大きな意味を持っている。発声の面からみると、「ピッチ」との関連が高い。張りのある声は、その人の音域からすると、やや高目であり、「良くとおる声」である。

テレビのチャンネルを次々とまわしていて、ＮＨＫ教育テレビや放送大学のチャンネルになると、途端に何故か良く聞き取れず、思わず音量を上げてしまう。こんな経験をされた方は多いはずである。こんな時画面には、ストレートトークをしている講師の顔が映っている。放送局側では、自動音量調整装置を使っているので、音量は他の番組と変わらないはずである。それにもかかわらず聞き取りにくいのは、発音の問題もあるが、声に張りがないためである。

テレビを見ているとアナウンサーやレポーターは、屋外でのしゃべりになると声が張ってくる。あるいは、現場が騒々しいほど張ってくる。遠くの人に話しかける場合にも張ってくる。これに対してスタジオでのストレートトークは異常な静けさの中で、マイクに向かってしゃべるのだから声が沈むのは当然である。

アシスタントディレクターが、出演者に「カメラマンの付近に数人の聞き手がいると思って話しかけて下さい」ということがある。聞き手不在を補うための工夫であるが、声の張りにはつながらない。しかし、ここにヒントがある。「数人の聞き手がいると思って」ではなく「数十人の聞き手がいると思って」話してもらったらどうだろう。声は自然に大きくなり、張ってくるだろう。イメージトレーニングの発想の応用である。

通常は副調整室で指揮をとるディレクターが、スタジオに降りて指揮をとれば、講師とのコミュニケーションがとりやすくなり、緊張を和らげるには効果がある、つまりリラック度を上げる効果がある。「講師にやさしい演出の研究」で実証したとおりである。しかし、この方法は、元気度の観点からするとマイナスである。聞き手がディレクターに限定されてしまい、すぐ近くに居過ぎるために声の張りを下げてしまいかねないのである。

6　プレゼンテーション能力の発揮度を高める工夫（仮説３）―――まとめ―――

「リラックス度」「話し言葉度」「感情度」「元気度」の４つの尺度は、かなりの部分重なり合いながら、プレゼンテーション能力を構成する各要素と関連を持っている。この４つの尺度が、適度になるように演出上の工夫を加え、また講師自身がいくつかの注意すれば、出演講師は、自分の持つプレゼンテーション能力を、より十分に発揮するであろうことを述べてきた。

具体的な工夫や心構えを整理してみよう。先ずは、講師に要求される項目である。

講師は、次のような心構えで収録に臨めば、自分の持つプレゼンテーション能力をより発揮できる。(仮説３ａ)

(1) 訴えたい内容を話す。
(2) 台本には、ぎっしり書き込まない。
(3) 目の前に数十人の聴衆がいる場面をイメージしながら話す。

一方、演出を担当するディレクターには、次のような工夫が要求される。

次の演出上の工夫をすることで、講師のプレゼンテーション能力の発揮度は高まる。
(仮説３ｂ)

(1) 出演者の選定にあたっては、訴えたい内容を持った人を選ぶ。
(2) 「すわり」より「立ち」にし、動きのある演出を行う（カメラ向きを減らす)。
(3) 図表の提示は、順番に重ねておく「紙芝居方式」ではなく、全て貼っておく「美術館方式」にする。
(4) ツール操作は出演者（講師）本人が行う。
(5) 次画面表示装置やプロンプターを活用する。
(6) 収録の途中で停止し、時間管理の負担を軽減する。
(7) 素材ＶＴＲの説明を事前収録とし、時間管理の負担を軽減する。
(8) 項目のみを書いた見やすい台本を作る。

番組は、その論理構成を、しっかりさせなければならない。言うまでもないことである。しかし、論理構成は、番組全体を通してしっかりしていれば良いのである。部分部分についていえば、「もたつき」や「くりかえし」があって良い。不完全な文章でも構わない。肝心なのは、「適度な話し言葉」になっていることである。

そのためには、書かれた原稿（台本）を読んではいけない。頭の中で文章を作りながら喋ってもいけない。良いプレゼンテーションには、「勢い」が必要である。文を慎重に組み立てながら話すと、「勢い」が無くなる。「元気度」が落ち、「感情度」が落ち、「話し言葉度」が落ちる。

「数十人を相手にしたつもりで」「立って自由に動きながら」「プレゼンテーションツールも自分で操作しながら」「時間管理の緊張からも開放されて」講義するなら、そのプレゼンテーションは、聞き手（視聴者）の心に伝わるに違いない。

なお、プレゼンテーション能力の発揮度を高める工夫としては、ここに掲げたものが全てと

いうわけではない。別のアプローチの方法が見つかれば、違った工夫を案出できる可能性があることも付け加えておきたい。

＜参考文献＞

Bryant, Donald C and Karl R Wallace "Fundamentals of Public Speaking" New York : Appeleton-Century Croffs, Inc. 1960

箱田忠昭『成功するプレゼンテーション』日本経済新聞社　1991

本多聡行『プレゼンテーション能力』二期出版　1990

星野匡『プレゼンテーション術』日本経済新聞社　1992

放送教育開発センター『はじめて放送講師となる先生方へ』1991

市原光敏『アナウンサーになれる本』ＫＫベストセラーズ 1995

Jon May "How to Make Effective Business Presentation-and Win!"（川勝久訳『プレゼンテーション必勝テクニック』）プレジデント社　1986

金田一春彦『話し言葉の技術』光風出版　1956

北山国夫・関根健夫『プレゼンテーションこれが基本』日本経営協会総合研究所　1993

三浦大亮『説明説得のプレゼンテーション技法』株式会社通産資料調査会　1994

大石初太郎「リスナビリティ」平井昌夫他編集『現代・話しことばの科学』至文堂　1964

佐々木ほか『研究報告９６　講師にやさしい演出の研究』放送教育開発センター　1996

澤谷一夫・北山国夫『交渉に役立つプレゼンテーション技術』株式会社ぎょうせい　1994

田村尚『プレゼンテーションの技術』株式会社ティビーエス・ブリタニカ　1992

山口弘明『プレゼンテーションの基本知識』ＰＨＰ研究所　1994